

教えるものにとっては教える労苦がいよいよ少なくなり、 学ぶものにとっては学ぶところがいよいよ多くなる方法 ーヨハン・アモス・コメニウスの生涯と教育思想ー

A method of instruction, by which teachers can teach less,
but learners learn more.

-Life and Educational Thought of John Amos Comenius-

水田 聖一*

Seiichi Mizuta

History is not always kind to innovators, and it has been particularly unkind to John Amos Comenius. Given little mention in contemporary histories of education, Comenius nonetheless made major and lasting contributions that have shaped many facets and levels of contemporary education. The breadth and depth of his contribution is truly extraordinary.

Keywords: Comenius, Developmentally Appropriate Practice, think for oneself

I. コメニウスの教育思想

近代教育の父といわれるチェコの教育学者ヨハン・アモス・コメニウスは、主著『大教授学』の開巻劈頭の扉に、その書の目的を記している。

「私たちの教育学の、アルファとオメガは、教えるものにとっては、教える労苦がいよいよ少なくなり、しかし、学ぶものにとっては、学ぶところがいよいよ多くなる方法、学校に鞭の音、学習への嫌気、役に立たない労苦がいよいよ少なくなり、しかし、静寂と喜びと着実な成果とがいよいよ多くなる方法、キリスト教国家に、闇と混乱と分裂とがいよいよ少なくなり、光と秩序と平和と安息とがいよいよ多くなる方法を、探索し、発見することではなりません」¹。

コメニウスが出した答えは、一言で言えば、一人ひとりの子どもに、年齢段階に応じて、他人や自分の憶測の奴隷になるのではなく、自分で考え、判断することを教える、ということだった。4世紀以上も前に書かれた彼の著作の中にこの点が記されていることは、実に驚くべきことだ。

また、彼は『パンパイディア(汎教育)』の中でも、「先取りせずに、若者を形成する好機に留意するのだ。時期を早めて自然を助けずに台無しにするようなことがないように、ちょうど良い時

*流通科学大学商学部，〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

期に始める」²と述べて、発達と学習の進み具合は、一人ひとりの子どもによって様々に異なっていること、また様々な機能領域全体の中で、どの機能が先に発達するかも、一人ひとり異なっていることを認め、それぞれの学習者の「好機」を見極めるべきことを指摘している。

コメニウスはまた、学校の組織方法と教育内容の教授方法の両方において、「自然」を導きとした。彼は自らの教育的指針が自然法則に基づいており、その教育が実現されれば、教育過程は容易で、楽しいものになると信じていた。その指針は以下のとおりである³。

1. 生徒の精神が腐敗する前に、始めること。
2. 精神が、教育を受け入れるに適するよう準備がなされていること。
3. 一般的なものから特殊なものへ、簡単なものからより複雑なものへと進むこと。
4. 生徒が学ぶべきあまりにも多くの教材で、負担を抱えすぎていないこと。
5. 教育は、生徒の知的発達の段階に応じて等級付けされていること。
6. 生徒の興味関心に配慮がなされ、知性が自ら(ultro)求めていくもの以外は、何一つ強制的に押し付けないこと。
7. すべては、生徒の感覚を媒介として教授すること。
8. 自分自身で応用できるように教授すること。(*注: 教育の有用性の強調)
9. 教育内容すべてが、全く同一の教授方法で教えられること。

コメニウスは、教えられる子ども一人ひとりに注意したのと同じく、教育方法と教材の性質にも注目した。『大教授学』の中で彼は、科学、芸術、言語、道徳、宗教を教える方法について詳細に論述している。専門分野ごとに、彼は教育内容を習得するために採らねばならない特定の手順を概説した。例えば彼は、言語に関して、言語教育は最初に事物の研究と結びつけられるべきであり、子どもの興味・関心と認識・理解とを反映しているべきだと主張した。彼は、「子どもの前にキケロや他の大作家の作品を提示する者は、徒に時間を浪費している。というのは、もし生徒が学習内容を理解できないのであれば、どうしてその内容を力強く表現する技法を習得できるだろうか」と書いている⁴。

『大教授学』を読むとコメニウスの先見の明に感動し、実際感極まってくる。彼はルネサンスの初め、啓蒙期と理性の時代に生きたが、コメニウスの考えの多くは、著しく現代的だ。コメニウスは改革家だったが、革命的というよりはむしろ漸進的な改革家だったと言える。例えば、ラテン語の教授法には反対したが、ラテン語教育には反対しなかった。それゆえコメニウスは、子どもたちが単純なものから複雑なものへと、一歩ずつ、徐々に言語学習に導入されるべきだと考えた。彼は4冊のラテン語の教科書を書いた。出版年順ではなく易しい順に、『世界図絵』、『ラテン語の前庭』、『開かれた言語の扉』、『広間』であり、「絵」を見て「前庭」に入り「扉」を開けて「広間」に至るというイメージである⁵。これらは画期的な教授法を伴う教科書であり、以下そ

の内容を略述する。

『世界図絵』(*Orbis Pictus*, 1653)

オルビス・ピクトゥス(『可観界図示』)は、日本では『世界図絵』と翻訳されている。この本は一般に、世界最初の絵入り教科書と見なされている。絵入りの教科書はコメニウス独自のアイデアではないが、彼は初等言語教育にはじめて絵を導入した人のひとりだった。彼の汎知学の展望に合わせて、コメニウスは『世界図絵』の中に多種多様な内容を含めた。収められている対象の凡そは、章のタイトルから知ることができる。「神」、「世界」、「天」、「火」、「空気」、「水」、「雲」、「地球」、「地の実り」、「金属」、「家禽」、「啼鳥」、「野鳥」、「猛禽類」等である。それぞれの章の絵の下に、二つの段落があり、一つはその地方の言語、もう一つはラテン語で絵についての説明文がある。

『世界図絵』でコメニウスは、いくつかの異なった目標を達成することを望んでいた。第一は、魅力的で興味深い絵を使用することによって、子どもが自ら学習するよう誘なった。第二は、子どもの注意を言語と事物に向けることだった。最後に、コメニウスは関心と注意が、学ぶ準備のための前提条件であると信じていた。それゆえ、絵があることで子どもの学習過程が刺激され、教師の指示によろんで従いたいという子どもの意欲を促進した。『世界図絵』は絶大な人気を得て、17世紀および18世紀にも多くの言語に翻訳され、印刷され続けた。

『ラテン語の前庭』(*Vestibulum*, 1651)

『開かれた言語の扉』は、実際にはコメニウスが予期した以上に難解だった。コメニウスが晩年ハンガリーにいた頃に、この『前庭』、つまりローマ時代の家の外部からアトリウム『広間』までを結ぶ通路を表すラテン語である「ウェスチブルム」は書かれた。それは『開かれた言語の扉』の前段階に位置するものだった。それゆえ、文章はより短く、『開かれた言語の扉』よりも簡単な対象を扱っている。コメニウスの用語によると、物の偶有性や本質、行動や感情、家にあるものや学校にあるもの、美德などの話題を扱っている。コメニウスにとっては、この本に挿絵を入れられなかったのが残念だっただろう。彼は単語と物との類比が、教育方法の本質であると信じていたが、挿絵は、類比関係を強化するのに役立つ。彼の他の本と同様、『ラテン語の前庭』も広く出版され、翻訳された。

『開かれた言語の扉』(*Janua Linguarum Reserata*, 1631)

コメニウスはポーランド、レシュノ滞在期間中に、『開かれた言語の扉』を書いた。数十年前ボヘミヤ教団の牧師であった頃書いた『扉』(*戦火で消失)をもとに、コメニウスはこの本を作成した。しかしこのたびコメニウスは、この『言語の扉』をギムナジウムの生徒向けに書いた。しかもその目的は百科全書的で、100の章があり、世界の起源から精神とその能力まで、あらゆるも

のを含めた。『世界図絵』と同様、この教科書は主題ごとに、ドイツ語と対応するラテン語で隣り合った形で提示された。

コメニウスは、この教科書の使用を念頭に置いた明確な方法を考えていた。各章は 10 回読まれることになっていた。生徒は毎回読むたびに、教材のより複雑な表現に取り組まなければならなかった。この方法により、生徒はラテン語から地方語への直訳から、論理的な分析読書に、最終的にはキケロかウェルギリウスの特定の一節を相互参照するよう要求するような読みへと導いた。これは、言語の習得は、有効的な使用によってのみ実証されるというコメニウスの信念による。『世界図絵』より前に書かれた『開かれた言語の扉』は、後に『世界図絵』が出版されたときに、コメニウスに世界中からの賞賛をもたらした。

『広間』(Atrium, 1631)

アトリウム(中央広間)は、『開かれた言語の扉』を修了した生徒向けの、より高度な教科書として意図されたものだ。コメニウスの計画では、『開かれた言語の扉』は建築材料を供給し、『広間』は装飾を提供するものだった。それは名詞、代名詞、形容詞などの品詞を基本的に扱うものである。この本でコメニウスは、最も簡単なものから最も複雑なものへと品詞を分類している。各々の品詞は、例と共に説明されている。コメニウスにとって、『開かれた言語の扉』の方は、簡易型のラテン文法書になると考えていた。なぜなら言語教育において、文法は初期ではなく、後の時期に教えられるべきだという彼の信念を反映していたからだ。

教育実践への貢献

親に対するコメニウスのアドバイスは、かなり現代的である。彼は、子どもを母乳で育てるよう母親に促し、富裕層の母親が乳母を利用していることに関して不平を述べた。母乳で育てられる時期を過ぎた子どもの食物は、柔らかくて甘く、容易に消化できるものであるべきで、子どもたちに濃い味付けの料理を与えないように、とりわけ薬を与えないようにと強く助言した。薬に関しては、どうやらコメニウスの時代には、有害無益な万能薬を売り歩く押し売り商人がいたようである。コメニウスは、そのような薬で育てられる幼児が、「弱く、病弱で、虚弱で、青白い顔をして、愚かで、癌になりやすい」⁶と信じていた。彼は親に対して、乳幼児が新鮮な空気を十分に吸い、十分な睡眠と運動を確実に取れるようにと注意を促した。

コメニウスはまた、数学と言語発達の重要性も強調した。数学に関しては、乳幼児が 10 まで数えて、異なる量を区別できるようにすべきだと主張した。しかし彼は同時に、10 以上の数を越えることは、人生の初期の子どもにとっては非常に困難だとも認めていた。彼は乳幼児が、幾何学的形状を区別することによって、また大きな形や小さな形を区別することによって、幾何学の初歩を学ぶことができると主張した。しかし、6、7 歳の「理性の年齢」に達するまで、子どもた

ちが真の度量法を完全に理解できないことも認識していた。

コメニウスには、幼児の言語発達についても言うべきことがたくさんあった。彼は、子どもたちが事物を表す単語を教えられる前か同時期に、形状、植物、および動物のような事物そのものを学ぶ必要があると断固として主張した。彼は、子どもたちが正しく話すことの重要性も強調した。子どもたちが別の言語を学習する前に、母国語を話し、理解することを学ぶ必要があると彼は信じていた。しかもラテン語は、少なくとも 12 歳までは教えるべきではないと主張することで、同時代の人々とは違う意見を主張した。幼児期にはリズムや韻を踏む童謡だけでなく、詩を聞くことも益がある、とした。幼児は必ずしもその言葉の意味を理解していないかもしれないが、言葉のリズムと韻を楽しむからだ。これら多くの点で、コメニウスは読書のための最善の準備と考えられているもの、つまり現代の「言語強化法」を予想していた。

実際、教育に関する現代史にほとんど言及されていないにもかかわらず、コメニウスは、現代の教育の様々の面と水準とにおいて永続する貢献をした。彼の貢献の幅と深さは、実に並はずれている。今日、合理的な原則で指導されるほとんどの学校で、コメニウスの理論が実行に移されている。しかし、彼に続く数世紀の学校組織と教育的な発展には、実質的な影響を与えることがなかったのは無念だったに違いない。

さらに、コメニウスの子どもの本性についての考え方も非常に現代的である。コメニウスは、子どもは学習のための素因、彼の言葉で言えば、種(*semina*: セミナーの語源)を持っているが、それらの諸特性がどのように実現されるかは教育に依存している、と考えた。

「知識と徳行、神に帰依する心とのそれぞれの種子は、…、自然が与えております。けれども、知識そのもの、徳性そのもの、神に帰依する心そのものまでを、自然が与えているわけではありません。これらは、祈りにより、学習により、行ないによって獲得されるものなのです。このところから申せば、人間を教育される動物と規定した人は、間違っていなかったことになります。申すまでもなく、教育されなくては、人間は人間になることができないのであります」⁷。

以下において、コメニウスの生涯について考察する⁸。

Ⅱ. コメニウスとその生涯

初期(1592-1611)

ヨハン・アモス・コメニウスは、モラヴィア(現在のチェコ共和国の一地方)で 1592 年に生まれた。彼の父親は、極端に簡素な生活を送るプロテスタントのモラヴィア同胞教団に所属していた、富裕な製粉業者だった。教会員は聖書の字義通りの解釈に沿って、可能な限り純真な生活を送ることに専念していた。コメニウスは彼の人生を通じて、強い兄弟関係を維持し、様々な時点で、教師、牧師、教会の指導者(監督)として奉仕した。

宗教的対立と時代の偏見のため、同胞教団はモラヴィアや他の州から出ることを余儀なくされた。その結果、コメニウスは放浪生活を送り、大人になってからも、故国に戻ることは決してなかった。彼が幼少期に両親を失ったため、彼の放浪者としての生活は確定的になった。親族は彼の成育や学校へ通うための世話をしたが、暖かな愛情はなかった。彼は同年代の人々より遅い年齢になって、16歳でラテン語学校に入学した。彼が学ばなければならなかった幾千もの規則、死ぬほど退屈な文法の勉強、良い辞書なしでラテン語作家の文章を翻訳する骨折り仕事を、大人になったときに思い出し、苦闘する初等学校の生徒たちへの深い永続する共感を抱くようになった。教育経験で感じた憎しみのために、後に教育者になるという決定をすることになったのだろう。

大学時代(1611-1628)

1611年にコメニウスは、ヘルボルン大学に進んだ。彼はそこで、牧師になるための神学の研究をするつもりだった。教育哲学者ラトケの作品を知るようになったのは、ヘルボルンだった。教育改革を目指すこの思想家の過激な思想は、啓発された教育者としてまだ現れ始めたばかりのコメニウスの自己意識を育てるのに役立った。コメニウスはラトケの考えをすぐに追求した訳ではなかったが、ラトケの考えはコメニウスの精神に埋め込まれた。ラトケは、人間の精神の発達と知識の習得には、自然の配列があると主張した。彼は教育課程を設計する際には、この順序に従うべきであると主張した。またラトケは他の改革家と同様に、子どもは最初に母国語で教えられるべきだと主張した。とりわけラトケが提唱したこれらの考えは、後にコメニウス自身の教育哲学の一部になった。

しかし、コメニウスの人生におけるその時点では、彼は聖職者として人生を過ごすはまだ思っており、次にハイデルベルグ大学に進んだ。そこで彼は、哲学と神学を専攻した。しかし数カ月後には、資金不足のために中退しなければならなくなった。コメニウスは仕方なく、徒歩でプラハに旅立った。聖職に就くには若すぎたので、ブシェロフ(現在チェコ共和国にあるオロモウツ地域の町)にある同胞教団経営の初等学校で教師の職に就いた。教師としての役割を果たす際、彼はヘルボルンで習得したいくつかの教育的なアイデアを導入することができた。彼が最も関心を抱いたことは、ラテン語の学び方であり、子どもがその言語を学ぶのをはるかに簡単にするようなテキストを作成したいと思った。

1616年にコメニウスは聖職位を授けられ、フルネック(*現在チェコ共和国にあるシレジア地域の町)で教会の牧師になった。コメニウスは牧師の職務を果たしながら、初等学校の教育も続けていた。実際、彼はその町で執事兼教団付属学校長として選ばれるほど、教育の面で賞賛されていた。

学校長という新しい役割を引き受けた後でさえ、彼は牧師を辞めず、地域の霊的必要と教育的必要とを満たすために働き続けた。彼がフルネックで過ごした3年間は、おそらく彼の人生の中

で、最も幸福で最も対立のない年月だっただろう。この期間に彼は結婚し、二人の子どもができた。しかし、これらの静穏な年月は、宗教的色彩の濃い 30 年戦争(1618-1648)の勃発で終わってしまった。カトリック教徒のスペイン人にとって、モラヴィア同胞教団は背教者だった。スペイン人は、1620 年にフルネックに侵入し、略奪し、町を燃やした。コメニウスの家、書斎、数年掛けて書き溜めた未発表の教育関係の原稿は失われてしまった。

コメニウスはフルネックを逃れて、ボヘミアの資産家カール・フォン・ジェロティン伯爵のもとに避難した。亡命者としての試練は、疾患に起因する妻と子どもたちの死によってさらに増大した。しかもモラヴィア同胞教団への迫害は続き、1627 年の布告により、ボヘミア貴族による同胞教団への保護は終了してしまった。コメニウスと同胞教団の他の成員とは、ポーランドに向けて出発した。山を横断する際コメニウスは、最後に彼の最愛のボヘミアとモラヴィアを振り返ることができた。彼は後に、「私の人生は、放浪流転の旅だった。故郷というものを私はもったことがない。憩う所のない、不断の流転であった」⁹と述懐している。

ポーランドでの年月(1628-1641)

ポーランドの都市レシュノでは、コメニウスと同胞教団の他の数百人もの成員は、モラヴィア同胞教団の成員であったラファエロ伯爵の地所に迎え入れられた。レシュノでの 13 年間、コメニウスは想像力を徐々に膨らませてきたある考えを追求することができた。その考えとは、すべての実在するものの知識を網羅し、幼年時代から大学まで続く学年で段階付けされた教育課程を組織化した「汎知的な」(百科全書的な)教育制度だった。これがレシュノ滞在期に概略の形で完成させた『大教授学』¹⁰(*Didactica Magna*)だった。

コメニウスは二つの面で彼の全体構想に近づいた。一つは哲学的なもので、もう一方が実用的なものだ。これら二つは、死ぬまで彼の教育的議論の主要テーマとして残った。コメニウスは、最も重要な教育的な作品の幾つかもレシュノで書いた。『開かれた言語の扉』(*Janua Linguarum Reserata*, 1631)、『世界図絵』¹¹(*Orbis Pictus*)、および『母親学校への指針』¹²(*Informatorium der Mutterschule*, 1633)である。レシュノでは、コメニウスは初等学校でも教えて、学校の学年分けを導入し、各学年用の学習課程を詳述した。

『開かれた言語の扉』と『世界図絵』の出版は、好評だった。そしてコメニウスの教育作品は、国内外で認められるようになった。彼の教育上のアイデアや方法が、世界中の学校で実施され始められるのに、長くはかからなかった。彼はヨーロッパ大陸の多くの国で講演し、1641 年にはイギリスに招待された。しかし、イギリス教育の状態を非難するベーコンの著作があったにもかかわらず、イギリス議会はアイルランドの暴動と、教育改革に関心をもってはいたが専制君主だった王チャールズ 1 世に対する内戦とにあまりにも関与しすぎていた。コメニウスは、教育課程についての普遍的研究を実施するという全体構想を完成させるため、また人間界の知識全体を教え

る総合的な学校になる汎知大学の創設を行うために、イギリスからの財政支援のために期待していた。コメニウスは、汎知大学を教育制度の頂点として考え、その卒業生がすべての人に教育を与えれば、その社会的、実践的、霊的な報いを例証するであろうと考えた。世界のすべての人々に役立つ普遍的な大学という考えは、コメニウスが精力のすべてを捧げた彼の熱烈な夢だった。

イギリスが、コメニウスの壮大な教育計画のために財政支援を提供することができなかったことにショックを受け、彼はロンドンを去ってスウェーデンに向かった。心が打ちひしがれたために、彼はあきらめて壮大な教育計画を放棄することにした。その後、彼はスウェーデンからレシュノに戻ってきた。しかしその町では、彼の教育と執筆はほとんど収入をもたらさなかった。彼は貧困のために、彼の仕事を支援してくれる後援者を探す必要に迫られた。

エルビングでの年月と東プロイセン(1642-1648)

コメニウスは、オランダの商人で、後にスウェーデンに住んだ裕福な後援者ルイ・デ・ヘールを見つけた。しかしデ・ヘールは、「大教授学」などという壮大な教育計画にはほとんど関心を示さなかった。彼は、より効果的な教科書を書き、教師のためのより合理的な教授法を提供し、学校のより知的な学年制を導入するならコメニウスを支援すると申し出た。コメニウスは申し出を受け入れ、彼と再婚後の家族は 1642 年に、東プロイセン、バルト海のエルビング(*このとき一時的にスウェーデンの領土)の町に引っ越した。

監督また牧師として引き続き責任を感じていたコメニウスは、家族と他の同胞教団の人々に備えるために、普遍的な教育制度を作成するという夢を捨てなければならなかった。おそらく教科書を書くことにそれほどやりがいを感じていなかったのも、コメニウスは、エルビングでの教職を受け入れることと、教会の会合に出席するためにポーランドへ頻繁に旅行し、同胞教団の人々の霊的必要に仕えることによって気を紛らした。しかしデ・ヘールは、彼に腹を立てるようになり、彼の仕事をチェックするための委員会を任命した。

1646 年にコメニウスは、教育の取り組みについて報告するためストックホルムに行った。委員会は、彼の進捗状況を検討し、非常に有利な報告を行った。その時までにはコメニウスは、いくつかのプロジェクトを完了していた。一つは、言語教授において守られるべき性質と機能、文法を扱った言語教育に関する本であった。さらにこれらの文法に基づいた事典もあった。そして、学年ごとに読むべき本のシリーズもあった。デ・ヘールは、これらの資料を出版する準備をするようにと促した。

レシュノへの帰還(1648-1650)

コメニウスのキャリアの中での別の回り路は、1648 年にモラヴィア同胞教団の監督の死と共にやってきた。コメニウスは、彼の後継者として選ばれた。この任命により、コメニウスはレシュ

ノに戻らねばならず、デ・ヘールと交わした取り決めもあきらめなければならなくなった。しかしコメニウスの責任感の強さは、かつてレシュノで行ったのと同じくらいの速さで、デ・ヘールに完成した本を送ったことによって示された。コメニウスは、エルビングで孤独感を感じており、また裏切られもしたので、エルビングの町を去ったのは、実際のところ幸せだった。彼は、デ・ヘールが住んでいたスウェーデンと接触を持っていれば、ボヘミアとモラヴィアから同胞教団を追放した禁止令を終わらせることに、かなりの影響力を与えて思っていた。しかし、三十年戦争を終わらせたウェストファリア条約は、禁止令を撤回しなかったし、同胞教団は、彼らの祖国から追放されたままだった。

コメニウスは 1648 年から 1650 年まで、同胞教団の霊的必要性に応えるため、監督としての勤めに全ての時間を捧げた。しかし教団には資金がほとんどなく、コメニウスは教育制度を改善するため、他の地域からの有利な申し出がないか検討し始めた。そのような申し出の一つが、ハンガリーのトランシルヴァニアから来た。申し出は魅力的だった。寛大な給与に加えて、彼の哲学に基づく学校制度を作り上げるための完全な支援が提供されることになる。さらに、彼の本を印刷するための印刷設備も提供された。この取り決めは彼自身の仕事だけでなく、同胞教団に利益をもたらすと考えて、コメニウスは、数年の間監督の立場から解放されるよう同胞教団に請願した。

ハンガリーとポーランドでの晩年(1650-1670)

同胞教団は請願を受理した。そして、コメニウスと彼の家族はもう一度新しいコミュニティ、当時北ハンガリーの文化の中心都市サロス・パタクに移住した。彼は、すぐに 7 年制の学校の計画を策定した。コメニウスは 4 年間サロス・パタクに滞在した。(その間に 7 ケ年計画の最初の 3 年間で終了していた)。コメニウスが導入した革新的方法は、すぐに成功した。プログラムが肯定的な結果を生み出した理由の少なくとも一部は、教師が、コメニウス自身がレシュノで訓練した教師たちであったという事実に起因していた。

コメニウスは、1654 年にレシュノに戻り、監督の務めを再び行うようになった。しかし、スウェーデンがレシュノを攻撃したため、そこでの滞在は短いものだった。「ほとんど裸同然の状態で」¹³と彼が表現したように、コメニウスは着の身着のまま逃れた。彼がフルネックで失ったと同じように、コメニウスは再び、彼の著作と多くの未発表原稿との両方を失った。彼が長年書き溜めてきた原稿を失ったことについて、彼はこう述懐している。「私がこの仕事の損失を悲しむのをやめるのは、私が息を引き取るときだろう」¹⁴。

コメニウスは最初シレジアに逃げて、その後にドイツのフランクフルトに逃げた。そこでも安全であるとは感じられなかったため、彼はドイツのハンブルクまで旅をした。ハンブルクでは、約 2 カ月間、再起不能になるほどの大病に苦しんだ。コメニウスの病気を知ったとき、ローレンス・デ・ヘール(コメニウスの今は亡き元後援者の息子)は、彼に手紙を書いて、直接オランダの

アムステルダムに来るようにと言った。彼の父親のデ・ヘールとコメニウスが一緒にいた頃、若いデ・ヘールはコメニウスに対する深い変わらない愛情と、彼の教育思想に対する深遠な敬意とを育んでいた。彼は、コメニウスが住むための安全・安心な場所を確保したがっていた。1656年にコメニウスは、最終的にアムステルダムに移動した。

この移動はコメニウスにとっても、満足いくものだった。オランダ共和国は、ヨーロッパでもリベラルな地域で、多種多様な宗教的信念や意見に寛容だったからだ。彼はすでに 60 歳代になっていたが、生産的であり続け、1,000 ページからなる「教育学著作全集」を出版した。また、同様にオランダに逃げてきていた落胆する同胞教団の仲間に対して監督として奉仕し続けた。その上、若いデ・ヘールの努力のおかげで、アムステルダムの豪商から、是非子どもたちを教えて欲しいと請われた。彼はこの新たな状況下で、財政的にも、知的にも快適に過ごせたのである。

コメニウスは天才、近代教育の父と呼ばれるにふさわしい人物と見られても当然だ。彼は人間として謙虚で、上品で、寛大な男性だった。彼を知っていたすべての人が、彼の善良さ、親切、および誠実さについて証言した。

「他の人との関係において、コメニウスは並はずれで好意的で、融和的で、謙虚だった。また、隣人に仕えるために、いつも自分を犠牲にする準備ができていた。彼の生き方や会話だけでなく、彼の著作は、彼の感情の深さ、善良さ、廉直さ、敬虔の念の深さを示している。敵から加えられた非難を、彼は決して返したりしなかった。どんなに大きな不正を受けたとしても、決して悪に悪を返したりはしなかった。いつどんな時でも、そのときの状態が喜びであろうが悲しみであろうが、まったく忍従をもって、主に誉れを配し、主を讃えていた」¹⁵。

引用文献・注

- ¹ コメニウス著、鈴木秀勇訳『大教授学 1』明治図書、1968 年、14 ページ。
- ² J.A.コメニウス著、太田光一訳『パンパイディア』東信堂、2015 年、156 ページ。
- ³ コメニウス、前掲書、170-171 ページ。
- ⁴ コメニウス著、鈴木秀勇訳『大教授学 2』明治図書、1968 年、32 ページ。
- ⁵ 堀内守著『コメニウスとその時代』玉川大学出版部、1984 年、76 ページ。
- ⁶ Monroe, Will S. 1900. *Comenius: The Beginnings of Educational Reform*. New York: Scribner. p.114.
- ⁷ 前掲、『大教授学 1』81 ページ。
- ⁸ David Elkind, *Giants in the Nursery: A Biographical History of Developmentally Appropriate Practice*. 2015, Redleaf Press. 第 2 章(pp.24-29)からの翻訳。
- ⁹ Monroe, *Op.citt.* p.46.
- ¹⁰ 邦訳として、コメニウス著、稲富栄次郎訳『大教授学』玉川大学出版部、1956 年。コメニウス著、鈴木秀勇訳『大教授学 1、2』明治図書、1968 年がある。
- ¹¹ 邦訳、J.A.コメニウス著、井ノ口淳三訳『世界図絵』平凡社、1995 年。
- ¹² 邦訳、コメニウス著、藤田輝夫訳『母親学校の指針』玉川大学出版部、1986 年。
- ¹³ Comenius, John Amos. 1858. *The School of Infancy. An Essay on the Education of Youth, During Their First Six Years*, London: W. Mallalieu. P101.
- ¹⁴ Monroe, *Op.citt.* p.70.
- ¹⁵ *Ibid.*, p.81-82.